

日本物理学会第 77 回年次大会（2022 年）
領域 7 インフォーマルミーティング議事録

日時： 2022 年 3 月 18 日（木） 18:40 - 19:50

場所： オンライン開催

主催： 領域 7（運営委員）

+++++

議題目次

1. 学生優秀発表賞 表彰式及び受賞記念講演
2. 現領域代表、副代表、運営委員の紹介
3. 次期領域代表、副代表の紹介
4. 次期領域運営委員の紹介
5. 次々期領域運営委員の選出・承認【審議事項】
6. メーリングリスト運用に関して
7. 概要集提出率に関して
8. 関連会議・シンポジウムの紹介
9. 次回大会について
10. 言語の英語化について【審議事項】
11. 学会のオンライン化について【審議事項】
12. 学生優秀発表賞について【審議事項】
13. 今後の領域 7 の運営に関して【審議事項】

+++++

1. 学生優秀発表賞 表彰式及び受賞記念講演

領域代表・副代表・運営委員・次期運営委員からなる 8 名に審査を依頼し、以下の観点で審査を行った。

- 研究内容（研究の意義、新規性、妥当性）
- プレゼンテーション（ポスターの構成、伝わりやすさ、質疑応答）

その結果、8 名の候補者から以下の 2 名を受賞者として選出し、表彰式を行った。

☆ PSG-3 安村 乃絵瑠さん（埼玉大院理工）

「 $^{69,71}\text{Ga}$ -NMR 測定による λ -(BEDSe-TTF) $_2\text{GaCl}_4$ の特異な圧力誘起電子相の観測」

☆ PSG-17 小野寺 優奈さん（東理大理）

「グラファイト表面における小さい回転角度でのモアレパターンの観察」

受賞記念講演では安村さん、小野寺さんから受賞の挨拶と、スライドによる研究紹介をしていただいた。

2. 現領域代表、副代表、運営委員の紹介

領域代表：

小形 正男 先生 （東大） 【任期： 2021 年 4 月 ～ 2022 年 3 月】

領域副代表：

長谷川 達生 先生 （東大） 【任期： 2021 年 4 月 ～ 2022 年 3 月】

領域運営委員：

渡部 洋（立命館大総合科学技術研究機構） 【任期 2021 年 4 月 ～ 2022 年 3 月】

小林 拓矢（埼玉大理工） 【任期 2021 年 4 月 ～ 2022 年 3 月】

橋本 顕一郎（東大新領域） 【任期 2021 年 10 月 ～ 2022 年 9 月】

明石 遼介（東大院理） 【任期 2021 年 10 月 ～ 2022 年 9 月】

3. 次期領域代表、副代表の紹介

領域代表：

長谷川 達生 先生 （東大） 【任期： 2022 年 4 月 ～ 2023 年 3 月】

領域副代表：

佐々木 孝彦 先生 （東北大金研） 【任期： 2022 年 4 月 ～ 2023 年 3 月】

4. 次期領域運営委員の紹介

領域運営委員：

橋本 顕一郎（東大新領域） 【任期 2021 年 10 月 ～ 2022 年 9 月】

明石 遼介（東大院理） 【任期 2021 年 10 月 ～ 2022 年 9 月】

須田 理行（京大） 【任期 2022 年 4 月 ～ 2023 年 3 月】

榮永 茉利（阪大） 【任期 2022 年 4 月 ～ 2023 年 3 月】

5. 次々期領域運営委員の選出・承認 **【審議事項】**

現運営委員により、次々期運営委員として以下の方々を選出し、承認された。

次々期領域運営委員：

松浦 弘泰 （東大理） 【任期 2022 年 10 月 ～ 2023 年 9 月】

福岡 脩平 (阪大) 【任期 2022 年 10 月 ～ 2023 年 9 月】

6. メーリングリスト運用に関して

以下の内容を周知した。

- 現在のメーリングリストの状況
アドレス数上限： 1000
登録アドレス数： 876 (2022 年 3 月 18 日現在)
(勝手ながら、講演者のアドレスは運営委員が登録しています。)
- 卒業などで使われなくなったアドレスについて削除の連絡をお願いします
- なお、研究室 ML によって登録されているアドレスからは bunyu4@r7.div.jps.or.jp, committee_r7@jps.or.jp への投稿はできません。
(投稿の必要がある場合には、ML に直接登録してあるメールアドレスをお持ちの方
にお願いするか、運営委員のメールアドレスに直接、ご連絡をお願いします)

7. 概要集提出率に関して

2022 年年次大会における領域 7 の概要集提出率は $78/83=93.9\%$ であり、全領域中 8 番目であったことを報告した。

8. 関連国際会議・シンポジウムの紹介

特になし。

9. 次回大会について

次回年次大会について以下の内容を周知した。

東京工業大学 (大岡山キャンパス) ※オンライン開催または現地開催

期日： 2022 年 9 月 12 日(月)～15 日(木)

(※新型コロナウイルス感染症の拡大状況によっては開催方法等が変更になる可能性があります。最新の情報は大会ホームページでご確認ください。)

10. 言語の英語化について **【審議事項】**

【これまでの経緯】 (詳細は領域 HP の議事録を参照)

- 2019 年秋季大会のインフォーマルミーティングにおいて、留学生や外国人研究者の物

理学会参加を促進するために、シンポジウム講演の言語の英語化が議論された。審議の結果、シンポジウム講演の英語化に関して、領域委員会において領域 7 より提案することになった。

- 領域委員会で提案した結果、初学者にとって敷居が高くなるなどの理由で他の領域では英語化反対の意見が多かった。その後各領域で引き続き英語化について審議するよう要請があった。
- 領域 7 独自の取り組みとして 2021 年秋季大会では、【発表スライドの基本言語を英語とし、キーワードには適宜日本語を付記する】形を推奨した。
- アンケートの結果、英語化推奨（義務ではなく）に対する好意的な意見が多かったため、2022 年次大会（今大会）も引き続き英語化を推奨する方針を決定した。

【今大会】

- 以上の経緯を踏まえ、2022 年年次大会においては、前大会と同様に口頭発表において発表言語は日本語のまま、【発表スライドの基本言語を英語とし、キーワードには適宜日本語を付記する】形を推奨した。この内容は 11 月末の講演申し込み前と 3 月初旬の大会前の 2 回メーリングリストを通して周知した。
- 前大会と同様にこの取り組みに対するアンケートを行い、今大会のインフォーマルミーティングで結果を公表し、議論した。

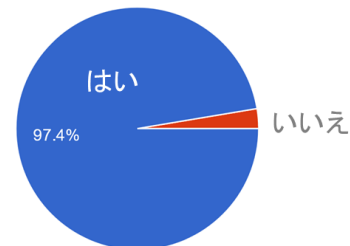
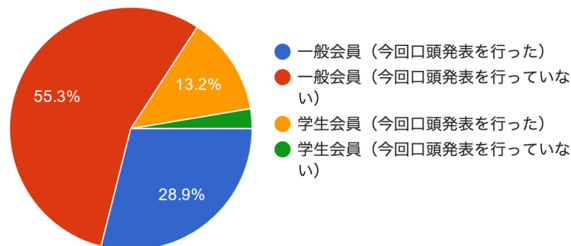
【アンケート結果】

- 今大会期間中（3 月 15 日(火)から 3 月 18 日(金)まで）に行なったアンケート(Google フォーム利用)について、次に示す集計結果を報告した。日本語版 38 件、英語版 1 件の回答があった。

回答者

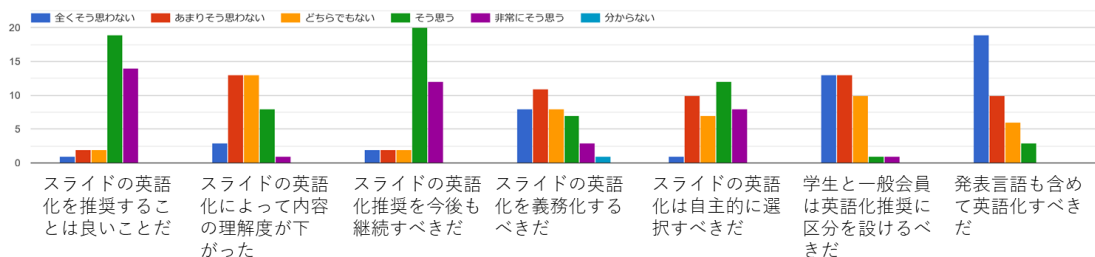
38件の回答

スライドの英語化が推奨されることを知っていましたか



選択式

全くそう思わない あまりそう思わない どちらでもない そう思う 非常にそう思う 分からない



(自由記述)

- 「キーワードには日本語を付記する形式を推奨した」というのは知らなかった。
- 日本の学会で日本人が話すのだから日本語で良いに決まってる。英語でしゃべりたいなら各自勝手にそうすれば良い。日本語を使えない外国人が英語でしゃべるのは全く構わない。勿論日本語でも良いが。近頃蔓延ってきた英語化イデオロギーというのは、まさに愚民化の現れですね。
- 基本的に英語義務化。ただし真にやむを得ない時は日本語でも可能、でいいのではと思います。
- 国際会議ではないので、英語化はほどほどにしておくべきと考えます。
- 国際学会で使い回せるので以前から自分のスライドは英語で作成してきましたが、義務化には反対です。日本の学会で日本語が使えないのは不便です。教員の立場からすると、限られた時間の中で発表の準備をする際に、学生の卒業研究や非物理学会員の日本語のスライドを使い回すことができないのも困ります。また、全国の学生の英語力に幅広い分布があることも考慮して頂きたいと思います。物理的な内容よりも英語の添削に時間が取られるとしたら本末転倒です。さらに、学生が英語の発表にこぎつけたとしても、多くは互いの発表を理解できないのではないかと心配です。(教員も五十歩百歩かもしれません。)
- スライドの英語化、発表の英語化は、強く推奨するにとどめ、義務化はすべ

きでない。発表が英語コンテストになってはいけない。内容をより高めることがもっとも大事である。

- 地方国立によくあることだが、本学の院生の半数は TOEIC600 点が取れない。英語化により他者のスライドがほとんど理解できず、また、口頭発表する機会も失うことになりかねない。現時点では、本学会には参加しないよう、学生には指導している。また、一般会員のスライドも適切な英語を使っているのか、疑問に感じる場合もある。
- 発表の英語化は時期尚早だと思います。英語発表である事が立派な研究である事になりそうで危惧します。英語発表を推奨する程度が良いかと思います。
- 昨今の講演内容がかなり専門化・先鋭化してきているため、専門用語の英語化は分野外や初学者の学生・大学院生の理解の妨げになっているようです。さらに、英語での質疑応答となるとかなりハードルが高くなり、現状でもほとんど若い人からの質問が見受けられない事態に拍車をかけることになりそうです。
- 口頭での発表と視認での単語の違いに違和感があった。
- My opinion is very subjective as I am a foreigner. But, it is very beneficial for researchers and graduate students in Japan if the JPS meeting becomes an international conference. If this is difficult, I recommend 1 or 2 days out of the whole days are dedicated to an international conference.

【審議事項】

- 次回大会も英語化を推奨する提案を行い、是非を議論した。

【意見】

- 多数の発表でスライドの英語化が実施されており、推奨は一定の効果があったと思われる。
- 過去3回のIMで議論されており、だいぶ意見も出尽くしてきた。
- 他領域ではシンポジウムを完全に英語化した前例があり、参考にしても良いかも知れない。
- 学会は学生にとって研究内容の勉強・理解の場でもあるので、完全に英語化してしまうとその妨げになってしまう可能性がある。
- 「スライドの英語化を推奨」という形が現時点では最も適切ではないか。

【次回 2022 年秋季大会に向けて】

- 次回大会も引き続き同様の形態で英語化を推奨する方針を決定した。

11. 学会のオンライン化について 【審議事項】

【これまでの経緯】

- 日本物理学会は感染症対策として 2020 年秋季大会から今大会まで 4 大会連続でオンライン開催となった。当初はやむなく実施したものの、スライドが見やすい、旅費をかけずに参加できる、海外からの参加者が見込まれる、会場を提供する側の負担を減らすことができるなど多くの利点があることがわかった。
- 理事会では年 2 回のうち一方をオンライン開催にするなど、定期的なオンライン開催の可能性を検討している。

【今大会】

- 大会理事から定期的なオンライン開催の利点や問題点について意見収集の依頼があったため、メーリングリストを通じて領域内から意見を募った。

【アンケート結果】

- 年 2 回のうち 1 回はオンライン化に賛成（7 件）、オンライン化には反対という意見があった。

（メリット）

- 3 月の学会期間は就職活動期と重なるので、オンラインにしてもらえれば、学会発表と両立できる機会が増すので良い。
- 分科会（秋季大会？）の定常オンライン化、賛成です。海外の人も参加しやすいという意味では、秋だけ英語化をもう少し実験的に進めてみても良いのかもしれない。
- 二回のうち一回はオンラインでも良いかと存じます。対面学会も、参加して出張することが学生の研究に対する動機になりますので、年に一回はあった方が良いと思います。
- 学部生など若い学生の参加が促進される（旅費不要ですし、気軽に聴講できることも利点となります）。
- 年配の先生方や身体障害のある方も参加しやすい（ぱっと見ただけでは健常者と変わらなくても身体障害のある人はいます。広い会場間の移動に苦勞されると聞きます。）。
- 学会サイドに立つとオンライン開催は極めて有効な学会運営かと思います。従って、大掛かりな大会については一部をオンラインにすることに賛成いたします。
- オンラインだと現地開催で入場が遅くなってしまう（コロナでなくても）会場の収容人数制限により入場できない人気セッションを聴講できる利点がある。

（デメリット）

- 数回ほどオンライン学会に参加・発表をしました。学会を聞くだけで良い人はオンラインはとても便利でしょうが、私、個人的には何のメリットもありません。これまでセッションの休み時間やランチでのちょっとしたディスカッション、夕食時の交流や新たな出会いが研究を進める上で非常に重要でした。また、発表した時のオーディエンスの反応を見て、自分のアイデアが正しいのかどうかの判断

もしていました。オンラインでそれが全てできなくなりました。よって、他研究者との交流の機会がなく、ディスプレイ越しでオーディエンスの顔が見えない・反応がわからない中で発表するのはまったくメリットがありませんので、私はもうオンライン学会には出ない事にしました。

- 博士後期課程の学生については対面での大きな学会で講演したことがないと、極めて不利だということが最近分かってきました。今年、博士後期課程に進学する学生は、結局一度も対面での学会発表を経験できずオンラインによる個別対応の質疑応答しか行ったことがありません。質疑応答の緊張感や、登壇者を交えた複数の研究者の議論にどのように参戦するのかはオンラインでは味わうことができない貴重な体験であって、特にこの方向での経験がないと、その後の国際会議や補助金獲得や各種支援プログラムの面接などでかなり苦労しそうです。少なくとも、大規模な学会の講演の機会を縮小する場合には何らかの分科会的なものを運営することも併せて検討いただければと思います。

【審議事項】

- アンケート結果を踏まえつつ、オンライン化のメリット・デメリットについて議論する。

【意見】

- ポスター発表は対面でないと難しい。
- 学生の発表の機会が失われる。
- 学生の場合、オンラインだと原稿を見ながらの発表が普通になってしまい、今後のためにも良くない。
- 遠方からの参加者にとってオンライン化はメリットが多い。朝早いセッションには前泊の必要があり、夕方以降のセッションではその日のうちに帰れないことが多々ある。

【次回 2022 年秋季大会に向けて】

- アンケート結果と IM で出た意見を取りまとめ、学会に提出する。

12. 学生優秀発表賞について **【審議事項】**

【これまでの経緯】（詳細は領域 HP の議事録を参照）

- 2016 年秋季大会から大学生・大学院生等を対象とした 優秀ポスター賞の表彰を実施、2018 年秋季大会から物理学会の正式な賞となり、「学生優秀発表賞」と名称が変更された。
- 2019 年年次大会から年 2 回ポスター発表のみ審査対象としている。
- 2020 年秋季大会以降はオンラインでの審査となっている。

- 2021 年年次大会では賛成意見が多かった受賞記念講演を初めて行った。大会初日午後 (15:15-17:00) にポスターコアタイムを設け、その時間内に審査員がコメント機能（大会側が準備した機能）を使って質疑を行った。審査員自身及び他の参加者が行った質問に対する発表者の回答を参考に審査を行った。その後集計結果を 18:00 から行った懇親会において審査員間で協議し、受賞者を決定した。受賞者には受賞記念講演の機会が大会 4 日目のインフォーマルミーティング内で与えられることを当日中に通知した。

【今大会】

- これまでと同様に審査用のコアタイム（1 日目午後）を設け、1 日目夜の懇親会において審査結果を集計し、2 名の受賞者を決定した。4 日目夜のインフォーマルミーティング内で表彰式及び受賞記念講演を行った。

【審議事項】

- 次回以降もオンラインの場合は現在の審査形式を継続することを諮った。

【意見】

- オンラインの場合は現在の審査形式を継続することで良いのではないかな。
- ポスターのコメント機能の反応が非常に悪く審査に支障を来している。
- Slack を活用するのはどうか？→使い慣れていない人にはやや敷居が高い。
- オンサイトになった場合は以前の審査形式を参考に再検討する。ただしポスター発表は特に密になりやすいため、感染症対策が必要になるだろう。

【次回 2022 年秋季大会に向けて】

- 引き続きポスター発表での審査を行う。オンラインの場合は現在の審査形式を継続し、オンサイトになった場合は再び審議を行う。ポスターのコメント機能に関しては大会本部に改善を依頼する。

13. 今後の領域 7 の運営に関して **【審議事項】**

【これまでの経緯】

- ここ数年で物理学会会員が大幅に減少し、また領域 7 での発表件数も減少傾向にある。今後領域 7 を盛り上げていくためには、運営員でこの状況を分析し、なんらかの方策を講じる必要がある。
- その第一歩として、領域 7 で発表件数の増えている有機導体のトポロジカル物性に関して、新たにキーワード一覧に「トポロジカル物性」（英: Topological properties）を加え、このキーワードを選んだ講演は領域 4, 8, 9 との合同セッションテーマ「トポロジカル表面関係」を設定できるようにした。これによって領域間の議論が活性化することを目指す。

【今大会】

- キーワードに「トポロジカル物性」を設定した発表が口頭9件、ポスター1件あった。
- 領域7,4,8,9 合同シンポジウム「分子性結晶におけるトポロジカル物性の展開」が開催された。

【審議事項】

- キーワードに「トポロジカル物性」を加えた効果は実感できたか意見を募った。

【意見】

- シンポジウムには300人を超える聴衆が集まり、他領域からの参加者も多かったと思われる。その点ではトポロジカル物性をキーワードに加えたのは良かったと思う。
- 良いキーワードを選ぶことで他領域との交流が深まると期待される。
- 分子性導体に閉じたようなキーワードでないものを探し、新たに加えたい。

【次回2022年秋季大会に向けて】

- 他領域との交流が活性化されるようなキーワードを模索する。
- 発表件数の増減の推移をデータ化して現状を把握し、議論を続ける。